

中之島の足あと

Nakanoshima Story

歴史を語り継ぐ

中之島は三度生まれ。高島幸次
モダン中之島、アート探訪。橋爪節也

古地図に学ぶ

水辺の風景の記憶。

写真でふり返る

わたしの懐かしい景色。

住む人の声を聞く

中之島のことが好き。
町会へようこそ。



歴史

*Nakanoshima
History*

歴史を語り継ぐ「江戸時代」

中之島は
三度生まれ。
。

高島幸次

（大阪大学招聘教授／大阪天満宮文化研究所）

中之島は、大川の土砂が自然堆積して生まれた中州だ。それは周知だとしても、大川が人工的に開削された河川だということは意外に知られていない。

古代の上町台地は、その東側に河内湖が広がり、西側には大阪湾が眼下に迫っていた。そこで、台地の北端に位置した宮都の治水のため、4〜5世紀のころに、台地の北方に伸びる砂洲が切り開かれ、湖から湾に水路が通された。この「難波の堀江」と呼ぶ水路が、次第に整備拡大されて現在の大川となるのだ。

しかし、そこに中州が生まれるには、悠久の年月が必要だった。文献に「中之島」が登場するのは、この開削から千年以上も後の、江戸時代初期のことだ。

城下町と中之島の開発。

天正11年（1583）、豊臣秀吉の大阪築城が始まる。当初の城下町計画では、城郭の西方に広がる低湿地を避けて、南方に延びる

上町台地上に建設されるはずだった。

具体的には、四天王寺と住吉大社の門前町を取り込み、堺湊を城下町の外港とする、南北に細長い町域だった。そのため、城郭の西北に位置した中之島は、城下町計画の埒外に置かれていた。

ところが、慶長元年（1596）の大地震によって堺湊が壊滅すると計画は変更され、西方の低湿地を開拓し、その海辺に新たな湊を建設することになった（後の大阪港である）。結果、低湿地に生まれた「船場」が城下町の中心となり、その北に横たわる中之島の重要度が増したのである。

中之島の最古の史料は、慶長19年（1614）の大坂冬の陣の史料だ。合戦の火蓋が切られた直後、11月30日に徳川方の武将・石川忠総が中之島の「五分一」に陣を置いたという記録だ。陣地を構えたということは、満ち潮でも水浸しない中州が成立していたことを物語る。中之島の最初の誕生だ。

「五分一」はその土地で取れた生産物に対する税率を示す地名だから、中之島は、漁業や農業の生産の場として生まれたことがわかる。

同地は江戸時代には「本五分一町」と呼ばれ、現在では国立国際美術館と大阪大学中之島センターが建ち、大阪新美術館の建設予定地でもある。

続いて元和3年（1617）には、淀屋常安が本五分一町の西方を造成し、満潮時にも沈まないよう整備した。常安は、豪商・淀屋の初代で、今も中之島4丁目にかかる常安橋にその名を留める。

造成地のうち、土佐堀川に南面する地は「常安町」、堂島川に北面する地は「常安裏町」と呼ばれた。常安町は、現在の大阪市立科学館からリーガロイヤルホテルの南側、住友病院を経て味の素グループ大阪ビルに至るあたり、「常安裏町」は、現在の大阪大学中之島センターから、リーガロイヤルホテルの北側のあたりだ。

このように、中之島は西半分の

開発が先行し、その後、上流部への土砂堆積に伴って、東部の整地を繰り返しながら島域を拡大するのである。

90藩の蔵屋敷が集まる。

大坂冬の陣と翌年の夏の陣に勝利した徳川家康は、外孫の松平忠明を摂津大坂藩10万石の藩主として、戦災復興に当たらせた。忠明は、わずか4年弱（1615〜19年）の在任だったが、城下町の基盤を築くとともに、中之島およびその周辺に蔵屋敷を誘致する先鞭をつけた。

忠明の移封後、大坂は城代が支配する幕府直轄地となり、中之島には蔵屋敷の建設が相次いだ。明暦元年（1655）には中之島を中心に66邸が確認できる。中之島は蔵屋敷の町として生まれ変わったのである。中之島、第二の誕生である。

天保期（1830〜44年）の記録では、中之島および周辺に90もの藩が蔵屋敷を置いている（島

内Ⅱ41藩、堂島川北岸Ⅱ27藩、土佐堀川南岸Ⅱ18藩、江戸堀川南岸Ⅱ4藩。

当時の最大の輸送機関は舟運だったから、堂島川と土佐堀川に挟まれた中之島は、物資輸送に最適の立地だったのだ。

ところで、「蔵屋敷」と俗称される施設は、正式には「大坂御屋敷」と呼ばれ、その基本的性格は江戸や京都などの藩邸と変わらず、本藩から派遣された責任者も藩邸のそれを意味する「留守居」と呼ばれた。西南諸藩の藩主が参勤交代などで来阪したときの宿舎に供

され、幕末の動乱期にはたびたび兵站基地の役目を果たしている。

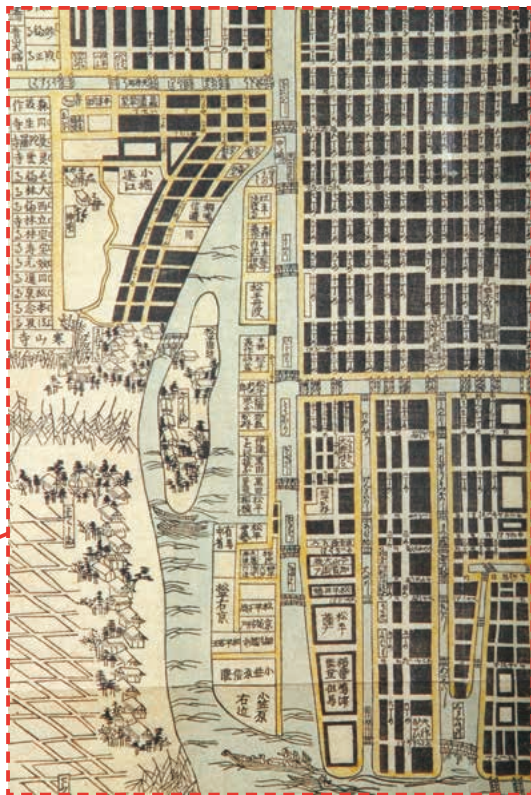
とはいえ、大坂の藩邸は、各藩が知行地で生産した「蔵物」（米と特産品）を貯蔵・販売することにも、知行地内で自給不能の物資を調達する倉庫業の比重が高かったので蔵屋敷と通称された。

初期の留守居は、蔵物の管理販売責任者である「蔵元」を兼ね、配下の武士たちも「蔵役人」と呼ばれたが、次第に蔵元を商人に委託するようになった。また蔵物の売却代金を管理する「掛屋」も商人であつたから、その倉庫業務は、実質的には両替商や米問屋などの大坂の豪商たちが担ったのだ。

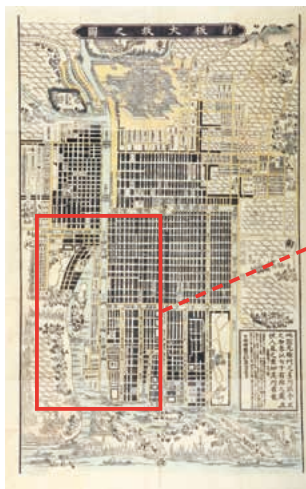
橋はいつ、誰が？

蔵屋敷出入りの商人たちの多くは船場に住んだから、土佐堀川への架橋は早かった。明暦3年（1657）の『新板大坂之図』では、梅檀木橋・淀屋橋・肥後殿橋（のち肥後橋）・筑前橋・田辺橋（のち常安橋）・越中橋の6橋が確認できる。

肥後殿橋は北詰にあつた肥後・熊本藩蔵屋敷にちなむ命名だ。の



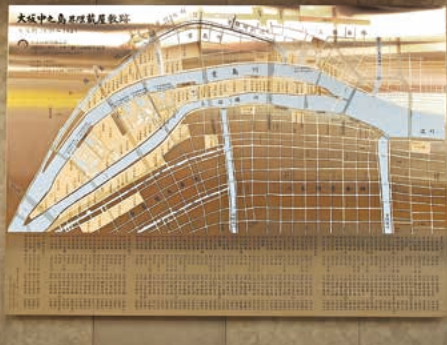
『新板大坂之図』 明暦3年(1657)
大阪市立中央図書館蔵



ち同蔵屋敷は西方に移転し、そこに藩主・細川越中守にちなむ越中橋が架けられた。筑前橋も北詰にあつた筑前・福岡藩蔵屋敷が由来だ。

淀屋橋が豪商・淀屋の架橋であ

ることはいうまでもない。田辺橋はその南詰めの葉種問屋・田辺屋（現・田辺三菱製薬）が由来だが、田辺屋が道修町に移転すると、この地を開拓した淀屋常安の名をとって常安橋と改称された。



京阪電車中之島線大江橋駅構内にある、
天保期の中之島の蔵屋敷の配置を示すレリーフ。

このように土佐堀川の橋は蔵屋敷や商人に関わる命名が多く、中之島の蔵屋敷と船場の深い関係を象徴している。先の「常安裏町」も、船場側が中之島の「表」であったことを意識した町名だ。

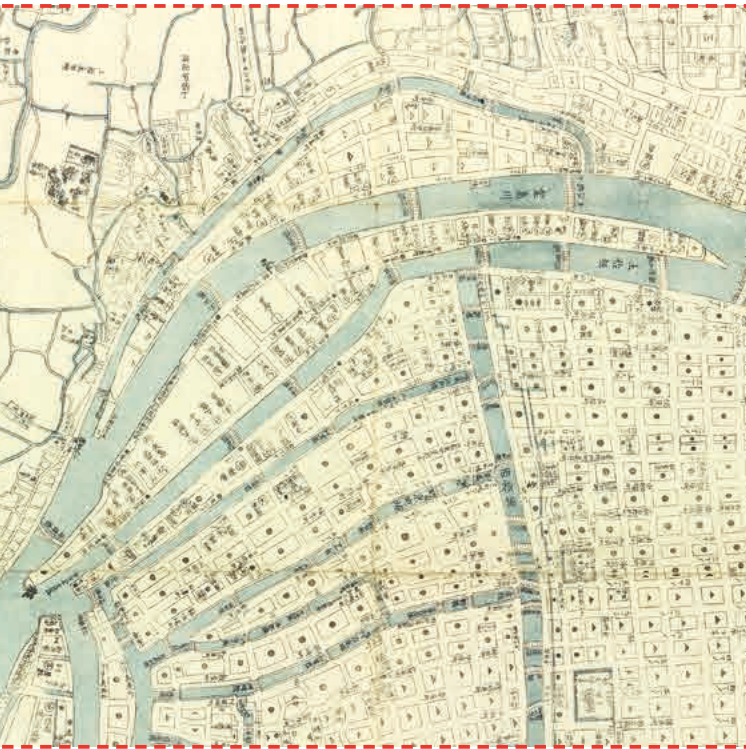
ちなみに、同地図の堂島川にはまだ一本の橋も架っていない。堂島との往来は渡船で事足りたのだ。そこで、文化3年(1806)『増脩改正摂州大阪地図』を見ると、堂島川に大江橋・渡辺橋・田蓑橋・玉江橋・船津橋の5橋が確認できる。享保15年(1730)、堂島に米市場が開設され、船場商人たちが中之島を越えて米市場へ行き来したのだ。なお土佐堀川では明暦3年に架っていた6橋のほかに、新たに「湊橋」が増えている。

蔵屋敷の廃止とその遺構。

話を蔵屋敷に戻す。明治4年(1871)に「廃藩置県」が実施されると、藩は消滅し、蔵屋敷は新政府に接収された。結果、中之島は広大な再開発区域として、大阪が近代都市に再生するための最大の資源を提供することになったのだ。

Nakanoshima History

『増脩改正摂州大阪地図』 文化3年(1806)
大阪教育大学附属図書館蔵



旧蔵屋敷の多くは、新政府や大阪府によって官公庁や病院・学校などの公共施設に生まれ変わった。民間に払い下げられて近代的倉庫業などに転用されたりした。現在、中之島に蔵屋敷の遺構を見つけることは難しいが、各蔵屋敷にあった神祠の名残は市内に散見できる。

蔵屋敷には、本藩などから勧請された神祠が祀られていた。有名なものに、広島藩(現・大阪新美術館建設予定地)の「厳島神社」、高松藩(現・リーガロイヤルホテル西側)、および丸亀藩(現・同ホテル南部分)の「金刀比羅宮」などがあり、明石藩(現・大阪市立科学館)の「柿本人麿神社」、肥後藩(現・大阪国際会議場及び住友病院)の「清正公(加藤清正)」のような地域性豊かな神もあった。

そのため、江戸時代の中之島は市中で最も多様な神が集中した地だったのだ。その祭礼には、日ごろは立ち入り禁止の町民たちも参拝を許され賑わったという。

蔵屋敷の廃止によって、その神祠は本藩で合祀されたり、市中の



他社に遷座されたりした。例えば、久留米藩蔵屋敷の「水天宮」は、丸亀藩蔵屋敷の「金刀比羅宮」に合祀の後、現在は露天神社（お初天神）の境内社となっている。宇和島藩蔵屋敷の「和霊神社」は、旧朝日新聞ビルを経て、今も中之島フェスティバルタワーに「朝日稲荷大明神」として祀られている。また、味の素グループ大阪ビル北側には「玉吉稲荷」が鎮座するが、かつて同地にあった小倉藩蔵屋敷の祠だという。福岡藩蔵屋敷（現・中之島三井ビル）の「菅公祠」

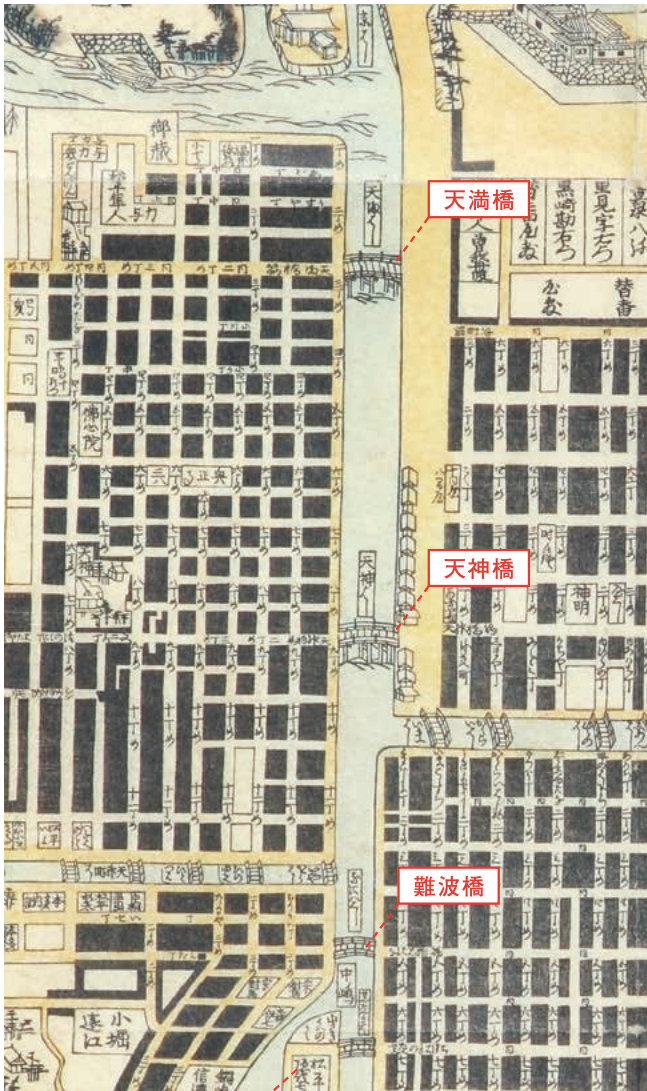
に奉納された「臥牛像」は生根神社（西成区）に安置されている。そういえば、同蔵屋敷の長屋門は天王寺公園に移築され、蔵屋敷唯一の遺構として、府の有形文化財に指定されている。

中之島は伸びる。

ところで、先に挙げた明暦3年の地図には、難波橋と天神橋も描かれているのだが、現代とは異なる

り中之島に橋脚はない。当時の中之島は難波橋の下流、現在の東洋陶磁美術館あたりまでしかなかったからだ。そのため、難波橋・天神橋は大川を一気にまたぐ長大な橋として、上流の天満橋とともに「浪速三大橋」と称されていた。当時の中之島東端には、山崎藩の蔵屋敷があり「山崎の端（鼻）」と呼ばれていた。明和4年（1767）頃にその上流部に新地が造

成されると、「鼻から鼻が出る」という洒落から「風邪引き新地」と揶揄されたという。その後、明治9年（1876）にも上流部の埋め立てが行われ、中之島の東端は難波橋の上流に達した。この地には明治24年（1891）に市内初の公園である中之島公園が整備され、現在に至るまで市民の憩いの場となっている。明治37年（1904）には浜田



当時(1657年)の中之島の東端

藩蔵屋敷跡に「大阪図書館」（現・府立中之島図書館）が、大正7年（1918）には仙台藩蔵屋敷跡に「中央公会堂」が、大正10年には福井藩と唐津藩の蔵屋敷跡に「大阪市庁舎」が建設され、現在中之島の景観が芽生えつつあった。こうして中之島は第三の誕生を迎え、文字通りのシビックセンター（中央地区）となったのである。

市庁舎建設のころ、大川浚渫によって出た土砂で、さらに中之島の上流部が埋め立てられ、現在の島影が完成した。現在「剣先」と通称される先端には、噴水モニュメントが設けられている。

中之島の西端に目を転じると、ここにもかつては蔵屋敷が建ち並び、西端の蔵を意味する「端建蔵」と呼ばれた。この地で堂島川と土佐堀川は合流して安治川になり、

南へは木津川が分流する。そのため、この辺りには橋が密集し、宮本輝の小説『泥の河』も、この地に架る昭和橋・端建蔵橋・船津橋の描写から書き起こされている。

そして、第四の胎動。

中之島は、生産の場として誕生したが、当初の城下町計画では区画外に置かれた。しかし、そのおかげで、江戸時代初期に蔵屋敷が

建ち並ぶ広大な空間を提供することができたのである。

明治維新によって蔵屋敷が廃止されると、今度はそのおかげで、大阪が近代都市となるための再開発空間を提供することになったのである。

中之島はしぶとい。マイナスをプラスに転化する地霊が潜んでいるかのようだ。今、その地霊に導かれて、中之島は第四の誕生を迎えつつあるのかもしれない。

西部を中心にタワーマンションの建設が相次いでいる。その文化的生活を支える施設として、大阪府立中之島図書館、大阪市立東洋陶磁美術館、国立国際美術館、大阪市立科学館などが競い建ち、大阪新美術館の構想もある。他にも、大阪大学中之島センターの「適塾・懷徳堂展示センター」や、味の素グループ大阪ビルの「食のライブラリー」、大阪市中央公会堂の「岩本栄之助記念室」、日本銀行大阪支店の「資料展示コーナー」などのミニ施設も充実している。

中之島には、働く街から生活を楽しむ街に生まれ変わる胎動が始まっているようだ。

たかしま・こうじ

1949年大阪市生まれ。大阪大学招聘教授。専門は日本近世史。大阪天満宮文化研究所員も務め、天神祭研究の第一人者。また天神祭のボランティアガイド役である天満天神御伽衆を養成するなど、普及・伝承にも尽力する。多くの講演や古文書講座をこなすほか、天満天神繁昌亭で毎月25日に行われる「天神寄席」はじめ、落語会やイベントのプロデュースも多数。



歴史を語り継ぐ「明治・大正・昭和」

モダン中之島、 アート探訪。

橋爪節也

(大阪大学総合学術博物館館長)

画面奥が天神橋。その向こうに石町の高台にあった大阪生神女庇護聖堂が見えている。左側は現在のばらぞの橋。夕立ちで川面が波立った夏の叙情的な中之島の雰囲気が描かれる。



織田一磨「天神橋遠望」(『大阪風景』より)(1918年／大阪新美術館建設準備室蔵)

1882-1956

Nakanoshima History

日本画家・池田遙邨は、昭和3年(1928)2月に大阪に降った大雪を題材にとり、現在の東洋陶磁美術館あたりから眺めた中之島公園の雪景色を描いた。遠くに霞む大阪城は、石垣だけで、天守閣の復興は昭和6年(1931)である。



池田遙邨「雪の大阪」(1928年／大阪新美術館建設準備室蔵)

1895-1988

淀川水系の「欧米都市」。

明治・大正・昭和にかけ、大阪という大都会のなかに浮かぶユニークな島でもある中之島とその周辺は、めまぐるしく変貌していく。時空の探検隊としてタイムワープし、当時の中之島に上陸してみよう。見回すとそこは、欧米のメトロポリスをイメージさせる、突出したモダン空間であった。

まず最初は、明治21年（1888）、ドイツから輸入したトラスをもちいて鉄橋に架けかえられた天神橋付近だろう。あたりの風景は、ライン川のようにだと讃えられた。その雰囲気は、織田一磨の「天神橋遠望」に伝わる。入道雲がわき上がる夏空から夕立が降り注ぎ、鉄橋の背後に、池田遙邨^{ようそん}「雪の大阪」にも描かれる大阪ハリストス正教会の大阪生神女庇護聖堂がそびえている。

さらに本格的な近代化が進み、府立図書館や日本銀行、中央公会堂など壮麗な洋式建築が建ち並び出すと、中之島は、日本でも有数の近代的な景観を誇る地域となっ

ていく。

昭和初期、洋画家の小出栖重は随筆「上方近代雑景」で「さて大阪は驚くべく黒く低い屋根の海である」と嘆息する一方、最も近代らしい顔つきや大阪の近代的な都市風景の一つとして「中央電信局中之島公園一帯」を優秀とし、「大建築が増加すればするだけその都会としての構成的にして近代的な美しさ」は増加すると予言した。

その小出が、大阪市が東京市を抜いて日本第一、世界第6位のマンモス都市「大大阪」になった大正14年（1925）に描いたのが「街景」である。堂島ビルディングから中之島を見下ろし、現実の大阪を、まるで欧米のモダン都市に見えるように描いている。佐伯祐三「肥後橋風景」、国枝金三「中之島風景」、古家新^{しん}「朝の街景」をはじめ、他の画家たちも、中之島をモダンな都市イメージで画布に捉えた。

大正末から昭和初期の中之島に建てられた建築も国際イメージを強調する。大正15年（1926）竣工の朝日会館は古代エジプトを



新大阪ホテルのモダンなパンフレット。
(著者蔵)

イメージし、新大阪ホテルは水都にふさわしくヴェネチアンゴシック様式であった。

さらに中之島は、パリのシテ島のイメージも投影されたと思われる「都市美」の実現を意図した淀屋橋の遊歩道（逍遙道路）や観光艇「水都」が登場する映画「大大阪観光」（昭和12年・大阪市指定文化財）では、セーヌの遊覧船を思わせる洒落なワルツが中之島の場合に奏でられている。

中之島というコンポート。

次に景観から一步踏み込んで大阪にとってのシビックセンター（Civic Center）としての中之島をみれば、その圧倒的な存在感を再確認できる。

“大大阪”と呼ばれた昭和10年（1935）前後の中之島に何があったか主なものを列举してみよう。

天神橋のある東側から、中之島公園、中央公会堂、府立図書館、市庁舎、日銀大阪支店、中央郵便局、朝日新聞社、朝日会館、新大阪ホテル、大阪帝国大学医学部・理学部などが連なる。対岸にも、天満に控訴院（裁判所）、北浜に証券取引所、田蓑橋の北に中央電信局と商業会議所（後の大阪商工会議所）、帝国大学医学部附属医院などがあった。

念をおしておくが、大阪駅前到现在までそびえていた大阪中央郵便局は、それ以前は現在の中之島フェスティバルタワーの位置にあり、商業会議所も松屋町筋に移る以前は堂島川に面していたのである。

政治経済の中核をなす役所や議会、裁判所、商工会議所、金融、郵政に加え、文化や情報発信するホール、展覧会場、図書館、新聞社などの施設や機関、ホテル、教育では大学、医療では病院など、

堂島川を挟んで、右が堂島浜通、左が中之島。朝日新聞社や奥には建ったばかりの茶色いダイビルも描かれている。構図を工夫し、新しいビルばかりを連ねて、欧米都市の景観のように演出している。

art

Nakanoshima History



小出梢重「街景」(1925年／画像提供:ギャラリー新居)
1887-1931

夭折の画家・佐伯祐三が描いた中之島の風景。土佐堀川の向こうに見えるのは、左から時計塔のある朝日新聞社、中央郵便局、日本銀行大阪支店、一番奥が旧大阪市庁舎。



佐伯祐三「肥後橋風景」(1926年／朝日新聞社蔵)
1898-1928



古家 新「朝の街景」(1936年／星野画廊蔵)

1897-1977

古家は大阪朝日新聞社に在籍し、学芸部員として挿絵などを担当。この絵も、朝日新聞社から土佐堀川を眺めている。中央は錦橋、その右上には住友銀行、その奥に美津野運動用品のビルがある。



国枝金三「中之島風景」

1886-1943 (1927年／大阪新美術館建設準備室蔵)

淀屋橋付近から中之島の東を望む。奥の難波橋には市電が走り、その奥には天神橋、造幣局の煙突が煙を上げている。右側の塔のある建物は、土佐堀通沿いの光本写真館。

“大大阪”の中核施設がこの狭い地域にひしめいていたのである。

現代でも、国際会議場やフェスティバルホール、大阪大学中之島センターなどが加わったり、建設予定の大阪新美術館を含め、国立国際美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪市立科学館など、ミュージアム群もここに集積されつつある。

ミナミやキタの繁華街とは異なるかたちで、中之島は大阪という都市の舞台やショールームとして機能してきたのである。ホールやミュージアムをはじめ、そこは人が外から何かを求めて集まり、終わればまた外へ戻っていく場所でもある。

比喩的に言えば、「コンポート」(盛り皿)の機能を果たしてきたのが近代の中之島ではないか。そしてむろん、そこに何を盛りつけるかが都市にとって重要な課題であり、現代のわれわれに大きな課題を突きつけている。

君住む街角

―古くも新しい中之島―

ショールーム機能の一方、別の

視点で見直せば、中之島はクールな現代の無人島ではない。現在まで続く、濃厚に人の住む街である。人の住むことに関して画家の逸話では、二科会を設立した洋画家・石井柏亭は、明治38年(1905)頃、眼病治療のため、中之島6丁目の実姉の家に長期滞在して新町の緒方病院に通っている。

小出栖重の日記『断雲日録』には、「スケッチ板のいたを買ひに常安橋へ巡航船で行った」とあり、道頓堀から中之島まで巡航船に乗ったことが記される。当時、中之島にあった洋画材料の吉村商店(現・ホルベイン)に油絵のスケッチ板を買いにいったのだろう。文学では『泥の河』の舞台も中之島である。

そして称揚されるべきが、中之島を語る上で最初に取り上げるバイブルともいえるべき昭和12年(1937)の『中之島誌』である。中之島の歴史、文化、現況などに触れ、常安町中之島尋常小学校内の「中之島尋常小学校創立六十五周年、中之島幼稚園創立五十周年記念会」が刊行した。本文はなんと947ページ、続けて「校園沿

旧フェスティバルホールの「牧神、音楽を楽しむの図」。



戦後の中之島を語るキーワードの一つが「アート」だろう。昭和33年（1958）にフェスティバルホールが開設され、音楽文化の拠点となった。外壁の陶板レリー

「どんがった」中之島、世界へ。

革誌」128ページが附せられる。地域が自主刊行した郷土顕彰の記念誌として圧倒的に充実する。刊行の原動力となったのは、住民のプライドの高さと中之島という地域の魅力であり、その伝統は今再び、この平成の記念誌に引き継がれ、新しい息吹として感じられる。

フ「牧神、音楽を楽しむの図」は建昌寛三を中心とする行動美術協会会員の制作である。

さらに中之島に邸宅のあった実業家で画家の吉原治良によって、前衛美術家団体の具体美術協会が結成され、元永定正、白髪一雄、嶋本昭三、田中敦子らが参加した。昭和37年（1962）北区宗是町（現・中之島3丁目）に本拠として美術館「グタイピナコテカ」が開かれ、画家のサム・フランシス、ジャスパー・ジョーンズや作曲家のジョン・ケージなど世界的アーティストが訪れる。

その後、平成10年（1998）には大阪市中心公会堂で森村泰昌プロデュースによる「テクノテラピー」が開催されたり、また2009年からは、「水都大阪」でさまざまなアートイベントが催されている。

大阪の先端文化の発信拠点として中之島は存在してきた。国立国際美術館と並んで、近現代美術からモダンデザインも対象とする大阪新美術館が開館すれば、公会堂や図書館などの重文建築と併せて、

吉原治良 1905-1972

植物油問屋の吉原精油の社長であり、画家。シュールレアリスム風の絵画から抽象画へと作風を変化させ、戦前の抽象美術をリードした。後に具体美術協会を創設した。グタイピナコテカは吉原が所有する土蔵を改築して造られた展示施設。現在、三井ガーデンホテル大阪プレミアが建つ場所にあった。具体の作品発表の場であり、海外作家の展覧会なども行われるコンテンツボラリーアートの発信拠点であった。



グタイピナコテカの前に立つ吉原治良(1962年)。

大阪大学総合学術博物館叢書9『戦後大阪のアヴァンギャルド芸術』（大阪大学出版会・2013年）より転載



写真提供／大阪新美術館建設準備室

はしづめ・せつや

1958年大阪市生まれ。大阪大学総合学術博物館館長。専門は美術史・文化史で、特に近代大阪の美術についてのエキスパートとして知られる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像』『モダン道頓堀探検-大正、昭和初期の大大阪を歩く』（創元社）、共著に『大阪の橋ものがたり』（創元社）などがある。

シュペレー川の中洲に5つの美術館博物館が集まったベルリンの世界遺産・ムゼウムスインゼル(Museuminsel＝博物館島)のように、日本の博物館島として「アート」の強力な発信基地となるだろう。

中之島と「アート」がからんだ面白い2作品を紹介する。山本三郎「写真壁画」は昭和13年（1938）に大阪市立美術館で開催された「市民のための展覧会」に出品された、中之島と天王寺動物園を合成した超現実的な壁画写真である。巨象が渡る水晶橋や、堂島川に浮かぶ巨大な水鳥は、水都大阪フェスティバルなどで見られる

Nakanoshima History art

「ラバー・ダック」を予言するかのようにある。

もう一つは福田紀一のSF小説『霧に沈む戦艦未来の城』（河出書房新社・1975年）で、最後の場面で、大阪の浮沈をかけて中之島全体が巨大な戦艦として東京へと出撃し、消息を絶つ。現在、中之島東端の剣先に噴水があるが、中之島が巨大な船ならば噴水の位置には当然、スクリュウがあるはずでは…？

そこで結論。こうした自由かつ斬新で、とんがった発想も生まれてくるのが、大阪人にとっての中之島の魅力であり、永遠の新しさとも言えるのではなからうか。

画面左端に水晶橋、川は堂島川。大江橋北詰の上空から南東を見ている。動物たちのすき間に、ちらりと中之島の図書館や公会堂も見え、シュールな光景をくり広げる。



山本三郎「写真壁画」（1938年／『フォトタイムス』1939年3月号より）

生没年不詳

【明治維新〜昭和初期】

大阪の文教・産業の中心地へ。

明治維新に伴う版籍奉還により、諸大名の領地は天皇および明治新政府に返還されることになった。江戸時代に蔵屋敷が建っていた跡地の多くは官庁・文教施設になり、中之島は官公庁の集積地となる。

残った土地は民間に払い下げられた結果、中之島には銀行、紡績業、電気、砂糖などのインフラや公的性格の強い企業が集まり、近代大阪の産業の発展に大きく寄与した。さらに大阪が、後に東洋のマンチェスターと呼ばれる近代的商工都市として発展するに伴い、倉庫業も重要視されるようになった。その圧倒的な集積はこの戦前の地図にもよく表れている。

古地図に学ぶ

水辺の風景の記憶。

明治44年（1911）

「明治44年地籍図」を元に作製



※●は原文読めず。
※「株式会社」は省略。

中之島2丁目

大阪株式取引所、大阪中央郵便局の他、日本最初の貿易会社三井物産、日本綿花（後のニチメン）、江商合資会社（後の兼松）と繊維業の商社の「関西5綿」の内の2社が置かれ、明治政府の「富国強兵」「殖産興業」の中心だった様子がうかがえる。それぞれの区画は比較的小さい。

中之島3丁目

明治11年（1878）に2本の川を結ぶ貨物運輸のために造成された掘割と、そこに架けられた中之島橋、秋月橋が見られる。大阪朝日合資新聞会社、大阪倉庫会社の区画が目立つ中、北海道の実業家、堺市の企業名もあり、企業が集積。

中之島1丁目

大阪銀行倶楽部、大阪ホテル、豊國神社、公会堂、図書館、日本銀行大阪支店、明治24年（1891）に大阪市初の市営公園として整備された中之島公園と公的性格の強い施設が並ぶ。

Nakanoshima Memories_01

旧町名を知ろう。

町名変更の背景は？

（明治5年（1872）変更）
明治2年（1869）、江戸時代以来の南組、北組、天満組の大阪三郷制度が廃止され、東・西・南・北の四大組が置かれる。北組だった中之島は、天満組と共に北大組に編入された。明治5年、北大組の町名の統廃合、改称が大規模に行われた。（宮本又次『キタ風土記大阪』より）

（昭和53年（1978）変更）

市街地の住所表記をわかりやすくする昭和37年（1962）制定の住居表示変更によって町名が変わる。室谷聖子さん（P.23）の覚え書きによると、昭和51年3月、町名変更案についての住民説明会がダイビルで開催された。1回ではまとまらず、

〈昭和53年改変〉	〈明治5年改変〉	〈江戸時代までの町名〉
中之島1丁目	中之島1丁目	上中之島町
中之島2丁目	中之島2丁目	肥後島町
中之島3丁目	中之島3丁目	築島町
中之島4丁目	中之島4丁目	久保島町
中之島5丁目	中之島5丁目	白子町
		西信町
		常安町
	宗是町	宗是町
	常安町	本五分一町
		常安裏町
中之島6丁目	中之島6丁目	塩谷六左衛門町
	玉江町1丁目	次郎兵衛町
	玉江町2丁目	小倉屋仁兵衛町
		庄村新四郎町
	中之島7丁目	湊橋町

町域すべての編入
町域の一部の編入

山發貿易、江商ビルディングに加え、工業系の企業が集積。銅業、炭鉱、工業系の出張所が集まり、電報通信社、阪上病院、東神倉庫、北國新聞大阪市局も置かれる。

明治44年地図では中之島公園だった場所に大阪市庁が置かれ、豊國神社が移設。大阪裁判所や天満警察署中之島巡查派出所が置かれ、公的性格を高める一方、2丁目に面する通り沿いでは淀屋橋ビルディング、東洋セメントの民間企業が置かれている。大正13年(1924)に全焼した大阪ホテルは公園敷地内のため再建許可を受けられず、中之島の地図から消えた。

大阪朝日ビルディングには工業系、建築系の企業が集積。朝日新聞社、朝日会館も置かれ、朝日関連の建物が集積するエリアとなる。昭和10年(1935)に完成した新大阪ホテル(後のリーガロイヤルホテル)、抽象画家吉原治良(P12)の生家である吉原製油、三井物産大阪支店、東神倉庫大阪支店事務所及び倉庫も置かれる。

高等工業跡地に堂島米穀取引所正米市場が置かれ、米取引の中心となる。明治時代同様にわ筋沿いに民家が並ぶが、住友伸銅所分工場跡地に住友倉庫が置かれ、中之島5丁目の倉庫業の発展に伴い、倉庫業の色が濃くなっている。

明治44年地図にもあった中之島製紙他3社が合併し樺太工業となり、さらに昭和8年(1933)王子製紙となる。また東京倉庫が大正7年(1918)三菱倉庫に商号を変更した。明治44年以降、増田伸銅所、三菱倉庫ビルには銀行、商社、貿易、海運関係の民間企業が集積。大阪倉庫跡地には大阪市立実業学校ができ、引き続き工業エリアとして発展した。

急行汽船、合名会社尼崎
汽船部荷捌所・事務所な
ど、汽船関係の会社が集
積している。

大坂病院跡地に**大阪帝国大学医学部**、大阪府立高等女学校跡地に**理学部**、小学校敷地に**中之島青年園**が置かれ、明治時代から続く**大阪大倉商業学校**、大阪市**中之島尋常小学校**、幼稚園とあわせ、より文教施設が集積するエリアになった。一方で、新たに軍人後援舎、中之島防護分園、国防婦人会など、戦事関連施設も置かれた。

安田倉庫跡地に大阪ビルディング（現・ダイビル）が置かれ、インフラ、銀行、海運関係の企業が集積。通り沿いは明治時代と変わらず民家が並ぶ中、飯田ビルや中之島ビル本館、大阪洋服学校がある。

明治時代の住友倉庫に加え、三菱倉庫が置かれ、倉庫業のエリアとして発展する。

民家があった場所に通信局が置かれる。日本食料工業の工場、大阪川魚会社、大阪鋼材の倉庫が置かれ、玉江町同様に製造業として発展する。

大阪府立高等女学校跡地は分筆され、民家となる。なにわ筋沿いに民家が並ぶが、明治時代には民家だった場所に原田汽船、中之島ビル別館、天満倉庫、川西倉庫、公認奥田家政女学校、神戸海上火災保険大阪支店など民間企業に変わっている。



中之島と言えば阪大、その系譜。

写真提供／大阪大学広報課

大阪工業学校



〈工学部〉



医学部

〈医学部〉

適塾

天保9年
(1838)

緒方洪庵の私塾。今も北浜に史跡として残る。

明治29年 (1896)

大阪工業学校

玉江町に設置。
その後、都島に移転。
大阪帝大工学部となる。

工学部



大阪大学
中之島センター

明治12年
(1879)

大阪公立病院

中之島の広島藩屋敷跡に病院を新築して移転。

大正4年
(1915)

府立大阪医科大学

昭和6年
(1931)

医学部
大阪帝国大学が開学

医科大学は医学部に。医・理の2学部で構成。

昭和24年
(1949)

大阪大学

国立総合大学令により新制大阪大学に改組。

平成5年
(1993)

医学部が移転

医学部と附属病院が中之島から吹田へ移転完了。

平成16年
(2004)

大阪大学
中之島センター

医学部のキャンパスがあった場所に開設。

〈理学部〉

大正5年 (1916)

塩見理化学研究所

医科大学卒業生が
堂島浜通4丁目に設立。

昭和6年 (1931)

理学部

大阪帝国大学理学部となる。
中之島の常安町へ。

昭和41年 (1966)

理学部が移転

中之島のできごと



理学部

中之島は学校が集う街だった。

《こんなにあった！ 中之島の学舎》

◎中之島尋常小学校

明治5年 (1872) の学生公布により、中之島には中島・田蓑・肥後島の3つの小学校が開校。明治19年 (1886)、田蓑橋南詰に中之島尋常小学校として統合された。校門は肥後藩蔵屋敷の一部を移築したという。戦時中の昭和16年 (1941) に中之島国民学校と改称し、その3年後に廃校となった。



◎大阪府師範学校／大阪府第一番中学校

明治10年 (1877)、旧久留米藩屋敷跡に新設。当初は2校が同居していた。大阪府師範学校は後の大阪教育大学の前身であり、大阪府第一番中学校は府立大阪中学校と改称し、現在の北野高校の前身となる。明治初年の中之島は学校の新設・移転・校舎転用が目まぐるしいが、これらの学校が一時期とは言え中之島にあったことは覚えておきたい。

◎大阪府女学校

明治19年 (1886)、中之島にあった大阪府師範学校女学科より独立し、創立。府立高等女学校→市立大阪高等女学校→大阪府立中之島高等女学校と改称しながら、明治35年 (1902) に堂島浜へ移転。これが戦後になり府立大手前高校となる。

◎大阪大倉商業学校

明治40年 (1907)、現在の関西大倉中学・高校の創立者である大倉喜八郎が私財を投じて、常安町に開校。敷地は堂島川に面し、府立高等医学校 (後の大阪大学医学部) の隣の府有地を無償で借り受けたという。戦後になって移転した。

◎大阪市立扇町高校

昭和32年 (1957)、玉江町に移転してきた。もともとは扇町にあった高等女学校が、戦後になって統廃合を繰り返したためこの名前に。2008年、咲くやこの花高校が開校すると、在校生もそちらへ引越す。2010年には最後の卒業式が行われ、閉校した。

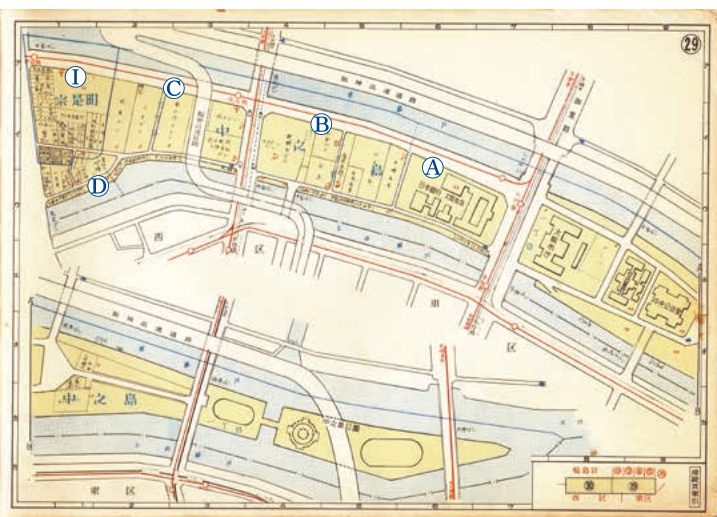
【戦後】

変わる風景、 受け継がれる建物。

戦時中は空襲に被災した中之島、被害の大きかった西側は、大きく景色が変わった。

この地図は昭和40年（1965）頃のもので、現在70〜80歳代の人たちが20〜30歳代だった時代に当たる。ダイビルの西側や南側は商店街のような雰囲気があり、地域の人たちにとって思い出深い場所だった。この後、度重なる再開発によって西側はどんどん風景を変えていくことになる。

一方、戦火を免れた東側だったが、昭和46年（1971）に大阪市が、中央公会堂の改築や中之島図書館の移転などを含んだ「中之島東部再開発構想」を発表すると、景観保存を求める市民運動が巻き起こる。その結果、昭和49年（1974）に中之島図書館が国の重要文化財に指定されると共に、日銀大阪支店が外観保存を発表。昭和53年（1978）には中央公会堂の永久保存も決定し、歴史的な建物が保存されることとなった。



①中之島1丁目：昭和11年（1936）に淀屋橋ビルディング、東洋セメントなどの民間企業が置かれていた敷地が日本銀行の敷地となる。これにより1丁目は公的施設のみのエリアとなった。

②中之島2丁目：比較的狭い地割で民間企業が集積してきたが合筆され、明治時代から続く日綿実業、江商ビルの他、電通、帝国産業、中央郵便局跡地に新朝日ビルが置かれた。

③中之島3丁目：掘割の上に高速道路ができる。東神倉庫の跡地に三井ビル、関電ビルが建ち、1丁目とは対照的に2・3丁目は比較的大規模な民間企業ビルが集積するエリアとなった。

④中之島4丁目：吉原製油跡地に富士紡績、天満倉庫跡地に3丁目にあった三井物産が置かれる。

⑤中之島4丁目：なにわ筋が拡幅され、なにわ筋沿いの民家がなくなる。常安町の大阪大学理学部敷地は4丁目まで広がり、比較的小規模なオフィスビルが集積するエリアとなった。

⑥中之島5丁目：昭和20年（1945）の空襲に被災し、焼け野原となったエリア。合筆し、各区画が大きくなり、住友倉庫跡地が住友病院となったが、東●倉庫、三菱倉庫があり、明治から続く、倉庫業が集積するエリアとしての特徴は変わらない。

⑦中之島6丁目：空襲で焼け野原となったエリア。玉江町2丁目にあった王子製紙が移転。合筆されたものの、通信局、倉庫が変わらずあり、昭和11年からの面影を残している。

⑧中之島7丁目：こちらも空襲で焼け野原となったエリア。道路ができ、区割りは変わったものの、小さい区割りで民家や汽船業が集積し、それまでの特徴と変わらない。

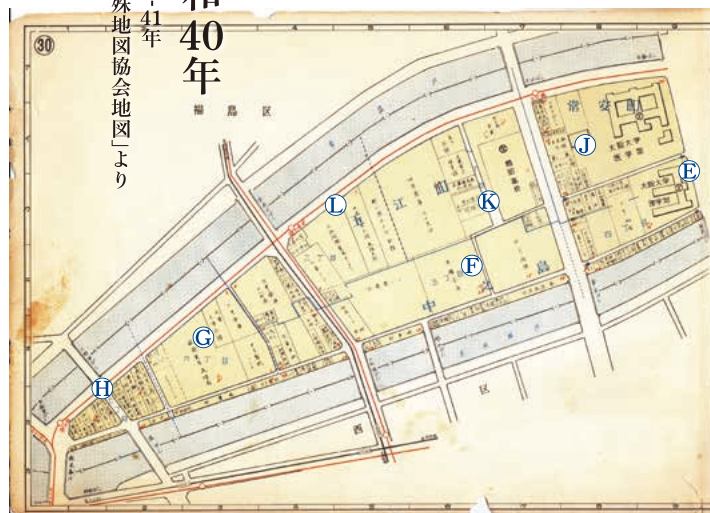
⑨宗是町：戦前の面影が最も残るエリア。比較的大きかった敷地も分筆され、民家が立ち並んでいる。昭和11年地図にあった飯田ビル、中之島ビルに残る。

⑩常安町：なにわ筋沿いの区画が変わり、分筆され民家となった場所と、合筆され企業ビルになった場所が見られる。大阪大学医学部が大倉商業、中之島小学校跡地に敷地を拡張し、大阪大学を中心とするエリアとなる。

⑪玉江町1丁目：なにわ筋が拡幅され、通り沿いの民家なくなり、扇町高校が置かれた。堂島米穀取引所正米市場跡地に住友倉庫が置かれる。戦前は倉庫だった場所に電気関係の施設が並んでいる。

⑫玉江町：2丁目の倉庫が集積していたエリアに新大阪ホテル、日本関電公団、大阪国際貿易センターが置かれる。大阪市立実業学校跡地は三井倉庫となり、明治から続いていた製造業が集積するエリアから、コンベンション拠点に変貌を遂げた。

昭和40年 日本特殊地図協会地図より



提供／日本特殊地図協会



写真提供／
朝日新聞社史編集センター



中之島のビルは大阪の「名所」。

朝日新聞社

上の写真は昭和37年（1962）のもので、右ページの地図とほぼ同じ時代。これを見れば、中之島には大阪を代表する名建築が集まっていたことが一目でわかる。

手前の黒い建物が朝日会館（1926年竣工）。新聞社関連の施設の他に展示会場や大公演場を備え、音楽・演劇・映画など文化の一大発信拠点だった。その左が朝日ビル（1931年竣工）。なんと言っても有名なのはその外観で、ステンレスやアルミパネルを外装に用い、「最もセンセーショナルなビル」と呼ばれた。四つ橋筋を挟んで新朝日ビル（1958年竣工）は、オフィスやホテルに加え、放送局、さらにフェスティバルホールを備える超複合施設だった。

これらはすべて朝日新聞社に関わる。その社屋が

中央右寄りの時計塔のあるビルで、これもまた大阪のランドマークだった。朝日新聞は明治18年（1885）に土佐堀川沿いの旧宇和島藩屋敷を社屋として以来（右上写真）、中之島で新聞を作り続けてきた。のみならず、こうした大阪の「名所」と呼ぶにふさわしい建築を建ててきたことで、オフィス街・中之島を代表する存在でもある。

2012年に竣工した中之島フェスティバルタワーでも、フェスティバルホールの上に超高層タワーをのせるという驚くような構造で話題となった。そして2017年春にはその西向かいに中之島フェスティバルタワー・ウエスト（仮称）が完成予定で、200mを超えるツインタワーというかつてない光景が中之島に誕生する。

関電ビル

関電ビルは、2004年に今のような超高層タワーとなるまで、ダイビル本館の東隣、現在は中之島ダイビルの建っている場所にあった。その旧関電ビルの竣工は昭和35年（1960）。当時の日本の建築基準法ではビルの高さは31mに制限されていたが、このビルは特別の許可を得て、地上12階・高さ45mの高層ビルとして建設された。ところが、写真を見てもわかる通り、敷地に対して建物にずいぶん余裕がある。敷地の60%をピロティやオープンスペースとして解放するだけでなく、高層階を大きくセットバックさせることで、隣接するビルにも自然採光を多く取り入れられるように配慮されている。新しい都市環境を提案する画期的なビルとして、竣工時は大きな話題となったそうだ。



写真提供／関西電力株式会社

ダイビル

大正12年（1923）、日本の汽船会社の先駆たる大阪商船は、宇治川電気・日本電力と共に株式会社大阪ビルヂングを設立。その本社ビルとして、大正15年（1926）に建てられたのがダイビルだ。当時、世界中へ航路を拡大しつつあった大阪商船は中之島を選んだ理由について、社史では「大阪市内目抜き地たる」と書かれており、中之島が開発によって注目を浴びている場所であったことがわかる。ダイビルの美しさは豪華客船にも評され、北西側から田蓑橋越しに眺めるその風景を、当時の作家・北尾鯨之助は「目下のところ、大阪における大建築の最高のもの」と絶賛した。2013年夏、現代的な超高層タワービルとして再オープンを果たしたが、低層部は旧ビルの意匠が見事に再現され、中之島の西のシンボルは今もなお健在である。



写真提供／株式会社ダイビル



②



写真でふり返る

わたしの
懐かしい
景色。



③



中島三幸(529号~32)



④

堀内昭宏さんが、父親が中之島で佃煮屋を
経営していた頃の写真を集めたアルバム。



昭和23年頃、中之島・三幸本舗前にて ↑

①

堀内昭宏さん

昭和23年（1948）頃、3歳の時に父親の事業の関係で宗是町（現・中之島3丁目）へ。18歳まで中之島で暮らした。

さんこう 佃煮屋「三幸」があった頃。

昭和44～45年（1969～70）頃まで、父親が中之島で「三幸」という佃煮屋をやっていました①。ダイビルの裏手、今は駐車場になっているあたりです。昆布の佃煮や鮎の甘露煮、ちりめん山椒なんかを作って売っていました。中之島で手に入れた自宅の敷地に工場と店舗を造ったんです。店舗に改装したのはもともと私たち3人兄妹の勉強部屋だったところですよ（笑）。戦後すぐのことでした。ものがない時代ですから、商売をやるのも大変です。昆布を炊くのに使う砂糖すら統制物資で満足に手に入らない。父親はいつも苦勞していましたね。僕は悪ガキだったので、近所の友達と遊んでいる時に店のものをつまみ食いして怒られたりね。そのうち国鉄大阪駅の専門大店に店を出せることになり、それでようやく軌道に乗せることができたようです。

そうしてある程度余裕ができるのと、父親は得意先に送る年賀状や暑中見舞いの絵を、喜多暉月という日本画家に頼んで描かせるようになりました⑤。「元来歴史好きで、商売のかたわら大阪の郷土史をよく調べていたんです。古い史料や

絵図を当たって画題を決めて、それを描いてもらう。いわば合作ですね。

その後、父は60歳になって年金をもらうようになると、仲間と一緒に大阪の歴史を紹介する雑誌を創刊しました。その雑誌は『大阪春秋』といって、今も多くの篤史家によって続けられています。

関電ビルの移転に伴って、店舗も工場も東成区緑橋に移ることにになりました。今となっては中之島に店があったことを示すものは何もありません。中之島にあった頃の生活は楽ではありませんでしたが、商売の基盤を築いたのはこの場所でした。そうふり返ると、少し寂しいような複雑な気分になります。



⑤



①



③

川と人が、 今よりずっと近かった頃。

桐生幸之介さん

昭和27年（1952）中之島生まれ。きりう
不動産信託代表取締役。中之島3丁目の
リバーサイドビルディングのオーナー。



②

昔の中之島は堤防が低く、すぐそばに川が流れているような感じでした。川沿いには水際まで下りていける石積み階段があって、石の間をカニが歩いていたたりしてね。うなぎや魚も泳いでいて、僕はあまりしませんでした。釣りをしている子もよく見かけました。僕が2〜3歳の時に、家の前を流れていた土佐堀川で防潮堤のかさ上げ工事が始まりました①。昭和29年（1954）頃ですから、ジェーン台風の被害を受けてのことだったのでしょう。人足たちが骨組みを運んできて、杭を打つように川に立てていくんです。窓からその様子をじっと眺めていました。

完成した防潮堤は、今よりはずっと低かった。しかしその後、昭和36年（1961）の第二室戸台風の被害によって、高い防潮堤が造られることになるのですが、僕が生まれる少し前、昭和24年（1949）頃、両親が家の隣に「グリン・リバーサイド」という店を開店しました。まだ新大阪ホテル（当時）も米軍に接収されていたような時期で、人が集まる場所がほしいと知り合いに頼み込まれた

そうですね。新大阪ホテルのキッチンが料理を作り、夜はお酒も出していたようです。

店は評判になって、やがて昭和30年代には若者たちや有名人が集まるサロンの社交場になっていきました。「クラブ・リバーサイド」と呼ばれていたんです。堤防が低かったので、ボートで乗り付けて川の方からテラス席に入るという粋な人もいました②③。

父親は阪大の法医学教室に勤めていて、ドイツ留学経験もあったし、親戚にも海外経験のある人が多かった。現地で見たリバーサイドに人が集う光景に憧れていたんでしょう。パリのシテ島の話や、「ベニスみたいに川にゴンドラを浮かべてみたい」なんていう話をよく聞かれました。

昔の中之島は、今よりもずっと川が近かった。少しずつ水辺を活かそうとする動きもありますが、またクラブ・リバーサイドのような光景が見られるようになれば嬉しいですね。



4枚の写真は長女が中学校に入った頃、昭和52年（1977）くらいのものです。

ティサンビルの前で撮っているのは、ピアノの発表会の帰りか何かでしょうね①。ティサンビルは帝国産業の事務所が入っていたビルで、中之島2丁目、今の中之島フェスティバルタワーの東側にありました。

姉弟3人仲が良く、どこかへ出かけるというと、いつもそのついでに写真を撮りました。旧大阪市庁舎の前で撮っているのもそう②。こういう写真を持って写真屋さんへ行くと、「海外旅行されたんですか?」と言われました（笑）。

* * *

桜の写真は阪大医学部のキャンパスの中です③。松下講堂の南側に桜並木があつて、春になるときれいに咲きました。とてもきれいなので、ある年、ゲートボールを



した後、お弁当を買ってきてお花見をしようということになり、それをきっかけに始まった町会でのお花見が今もずっと続いています。近所の人たちは阪大のキャンパスには自由に出入りしていました。学園祭にもよく行きましたね④。そうそう、道路に面して解剖室があつて、中の様子が見えるんです。子どもたちはよく覗いて、「来たらあかん」って言われたり（笑）。中之島にとつては阪大は特別な存在ですね。うちは喫茶店をやっています。学生運動の時代には、キャンパスへ入れないから店で医学書を抱えて勉強する学生さんも多く、講義をされる先生もおられましたね。今もたまに学生時代を中之島で過ごしたご年配の方や会社勤めの方が訪ねて来られます。



④

「絵になる」家族写真と阪大の桜。

室谷聖子さん

結婚を機に昭和38年（1963）に中之島へ。3丁目で営む「喫茶Bois＝ボア」は、町会の集まりなど地域のつながりの場でもある。



③



②



①

生家は宗是町（現・中之島3丁目）で、今もずっと生まれた所に住んでいます。この写真は近所で撮ったもので①、前列右が私。昭和15年（1940）生まれなので、ちょうど10歳の頃ですね。うちは五人姉妹で、私はその末っ子。写真の右奥が母で、2人の姉も写っています。後ろの建物は、左に少し写っているのが中之島三井ビル、その奥が新大阪ホテルです。今のリーガロイヤルホテルですね。裁判所をバックに写っているのは3番目の姉の（加藤）明ですね②。

当時の中之島では、新大阪ホテルはそれは目立っていましたよ。隣に住んでいたお姉ちゃんがエレベーターガールをやっていたね。でも、いつも前を通っていたけれど、子どもではとても入れませんから、眺めるだけでした。たまに映画の撮影があると、姉と一緒に観に行ったり。確かマリリン・モンローとジョー・ディマジオも来たんですよ（昭和29年）。その頃は大阪でホテルと言えばここしかなかったものですから。



藤田淑子さん（五女）

昭和15年（1940）に宗是町で生まれ、以来ずっと中之島で暮らす。



②

五人姉妹の記憶。



①

加藤 ^{はる}明さん（三女）

昭和10年（1935）生まれ。結婚を機に引越すまで25年間中之島で暮らす。



でいました。堂島川を挟んで、大阪高等裁判所をバックに写っているのは私です②。たぶん10代の頃でしょうね。18歳から大阪市役所に勤めていましたので、その頃かもしれません。

市役所勤めの時代は、家から歩いて通っていました。関電ビルや朝日新聞社の南側の道を通っていると、日銀のところに出て、その向かいが市役所でしょう。川沿いの歩道に柳が植わっていたのを覚えていますが。

中之島に住んでいた時の思い出で一番印象的なのは、戦後すぐの頃です。疎開から帰ってきて、毎晩、妹と手をつないで田蓑橋を渡って福島区にあった銭湯に通っていたんです。その時、橋の上から見た満天の星空は忘れられません。まだ戦災から立ち直っておらず、工場やネオンもなく空がきれいに見えたのでしょね。

昭和10年（1935）に宗是町で生まれ、結婚を機に引越すまで、中之島には25年間住んでいました。

「住む街」中之島の移り変わり

※桐生幸之介氏の調査および国勢調査の人口推移、各年代の地図などにより分析。

〈中之島の人口の推移〉

■ 大幅な人口増加 ■ 大幅な人口減少

町名／年	1940 S15	1950 S25	1955 S30	1960 S35	1965 S40	1970 S45	1975 S50	1980 S55	1985 S60	1990 H2	1995 H7	2000 H12	2005 H17	2014 H26
中之島1丁目	35	56	64	17	36	29	37	10	30	37	61	80	87	0
中之島2丁目	178	34	7	6	7	2	4	3	2	8	14	6	13	0
中之島3丁目	475	325	274	268	291	147	126	85	25	42	35	15	266	560
中之島4丁目	633	279	300	382	397	482	410	77	61	83	70	59	95	1,310
中之島5丁目	648	119	128	46	34	30	22	217	180	188	145	132	134	264
中之島6丁目	613	94	230	261	156	114	75	64	13	35	30	172	156	268
合計	2,582	907	1,003	980	921	804	674	456	311	393	355	464	751	2,402

※2014年は国勢調査結果に基づく。

※宗是町と旧中之島4丁目は3丁目に、常安町と旧中之島5丁目は4丁目に、玉江町1丁目と旧中之島6丁目は5丁目に、玉江町2丁目と旧中之島7丁目は6丁目に編入して算出。

昭和
15年頃

戦時中の中之島では1世帯に約5名が居住していた。特に旧中之島3～7丁目、宗是町、常安町、玉江町1丁目、2丁目（現・中之島3～6丁目）ではたくさんの住民が暮らしていた。



写真は朝日新聞社付近から西方を望んだもの。旧中之島4丁目、宗是町に瓦葺平屋・2階建ての民家が並ぶ。大正～昭和初期頃のものとは推定。提供／朝日新聞社史編修センター

昭和
25～35
年頃

昭和20年（1945）の空襲により、玉江町1・2丁目、旧中之島1・3・4・5・7丁目が被災し、特に現中之島5丁目より西側は焼け野原となる。これにより、多くの住民が居住していた4～6丁目の人口が大きく減少した。

昭和
35～45
年頃

昭和36年（1961）の第二室戸台風により水害に見舞われる。これを契機に土佐堀川の防潮堤を築造。これにより、土佐堀川沿いの民家が移転、人口が減少した。

昭和45
～平成2
年頃

中之島の開発が進み、多くの企業ビルの建て替えが進む。ウォーターフロント中之島らしい景観づくりのため、中之島遊歩道や中之島西公園などが設けられる。これらの開発により、民家・商店が移転し、現・中之島5・6丁目の人口が減少した。

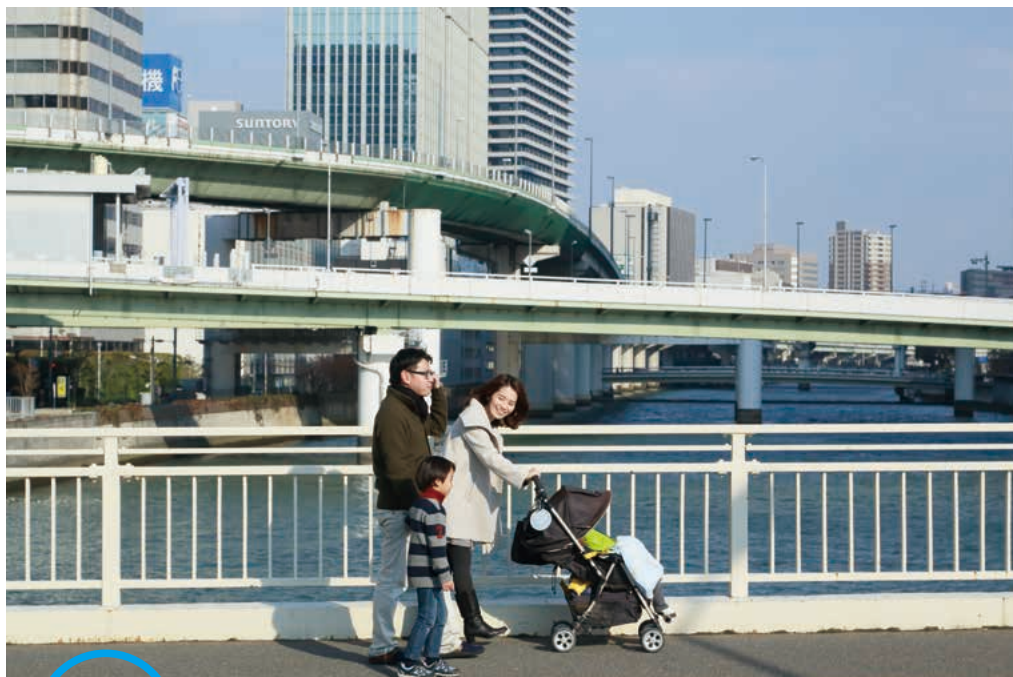
平成2年
～現在

大阪市立科学館や国立国際美術館が完成し、文教地区として魅力を高める中之島。緑地、水辺の景観の魅力にも磨きがかけられる。そのような中之島居住への人気も高まり、マンション開発が進み、中之島3丁目から西側の人口が急速に増加する。

中之島のこころが好き。

住む人の
声を聞く





住む人の声
01

中之島と言えば誰もが知っている。 そこに惹かれましたね。

中之島に住んで良かったのは、なんと言っても知名度が高いこと。誰に話しても知っているし、「いいところに住んでるね」と言われます。子どもが産まれたのをきっかけに中之島に引っ越すことにしたのですが、僕の実家が京都で妻が堺なので、中之島はちょうどその真ん中でしょう。祖父母に来てもらうことを考えると、これってけっこう大事なことなんです。その点、中之島は車と電車、どちらも便利です。

買い物の面では、スーパーは歩いて行けるところに2軒あるんですが、ドラッグストアやホームセンターは近くにはありません。ディスカウントストアもなくて、そのあたりのちょっと気取った感じは中之島だからでしょうかね（笑）。

子どもがいるとどうしても気になるのが病院。最初はどこに何があるかわからなくて、同じ年代の人に聞いて調べました。オフィスビルの中にも病院はあって、たくさんあるように感じるのですが、小児科などはほとんどなく偏りが激しいと感じます。また、小学校が

ないので、越境入学するか、同じ北区内でも遠く離れた学校へ通うことになります。越境入学した方が距離は近いのですが、そうすると近所の友達が少ないなど、地域とのつながりが薄くなる可能性もある。子育て世代の親はみんな悩むところだと思います。

それでも、総合的に考えると住む前の予想よりもはるかに住み心地はいい。やっぱり利便性が高いからでしょうね。僕たち夫婦は共働きということもあって、勤務先に通いやすい方がワークライフバランスもとりにやすい。今はそれがとてもうまくいっています。

中之島は今、人が増えつつありますよね。でも、町会（P30）の行事で長く住まれている方に聞くと、昔はもっとたくさんいたそうです。地元の子どもたちが遊んでいる、そういう風景がまた中之島で見られるようにしたいですね。

のぶとよ
小國展豊さん 美季さん

中之島在住7年目

長男誕生を機に、中之島へ引っ越し。
2人の男の子と4人暮らし。



一人暮らしをするなら、 こんな風に便利な場所がいいですね。

4年ほど前、怪我をして関電病院に入院することになりました。退院後も病院へ通う必要があり、近くに住みたいと思って物件を探していたところ、偶然今住んでいるマンションを見つけたのです。週に一度、ヘルパーの方に来てもらっていますが、その事務所があることも中之島に住みたいと思うきっかけになりました。

住み始めてもうすぐ3年、地元のイベントにも参加するようになりました。中之島はイベントが多くて楽しいですね。昔住んでいた神戸にお盆の季節には精霊流しをやっていましたが、まさかこんな都会の真ん中でも精霊流し（P30）をできるとは思ってもみませんでした。お月見やお餅つきもとても楽しいです。

市バスを使えば土佐堀1丁目から梅田まで1本で出られますし、京阪電車に乗れば京都に行くのも便利。以前は車を使っていましたが、中之島に住むようになってからは、公共交通が

便利なこともあり、車には乗らなくなりました。高齢で一人暮らしをするなら、こんな風に便利な場所に住むのが楽しいですね。

川沿いの遊歩道は安全で、歩くとても気持ちがいい。

部屋から見える街路樹や空の広さも気に入っています。大阪市立科学館の植え込みで見つけた草花を押し花にしたり、春には大阪市中央公会堂まで歩いて桜を見たり、身近な自然や四季を楽しんでいます。

高見弓子さん

中之島在住4年目

中之島にある病院に入院したのをきっかけに、明石市から中之島へ。



町会に入っていると、 子どもを見守ってもらえるような 安心感があります。

2009年に長男が生まれたのをきっかけに、中之島へ引っ越すことになりました。都心でありながら落ち着いたところや、通勤に便利なところ、そして子育て世代も意外に多いところに魅力を感じました。子どもが通う近所の保育園には、園庭はないのですが、靱公園や大阪市立科学館の広場へ散歩に連れて行ってもらえ、昆虫を見つけて遊んだり、子供たちは楽しんでいるようです。

今のところ子育てに関して不便に感じることはありませんが、小学校のことは少し気になっています。中之島は扇町小学校の校区なのですが、少し遠いので、近隣の西区の西船場小学校に通うこともでき、そちらへ通う子どもも多いようで

ですね。最近はマンションも増え、子育て世代もますます増えてきているので、中之島にも小学校ができれば、子育て世代にとってさらに魅力のある街になるのではないかと思います。

3年前から町会にも入って、いろいろな行事に参加しています。地元でのお付き合いは嫌いではないですし、むしろ近所同士の付き合いのないドライな関係だったらどうしようかと心配していたくらいなんです。子どもがいることもあって、近所の人の顔を知っていると、見守ってもらっているような安心感がありますね。

妻とは「子供が増えたので、子ども会ができればいいね」と話し合っているんです。これからも町会のイベントは続けてもらいたいですし、自分にも手伝えることがあればやっていきたいと思っています。

企業とのタイアップによる職場見学や工場見学など、ビジネス街としての地域特性を最大限に活かしたイベントがあれば、子どもたちにとって貴重な経験となりますし、中之島ならではの魅力がいっそう輝くのではないのでしょうか。

前林慎吾さん 美樹さん

中之島在住6年目

長男誕生を機に、中之島へ引っ越し。夫婦と2人の男の子と4人で暮らす。



住む人の声
04

たくさんのイベントに参加できるのが、 都会的なライフスタイルの良さだと思います。

中之島の魅力は、都会でありながら静かなロケーション。2人の子どもの社会人となり、夫婦でのんびり暮らすにはちょうどいいし、リタイアした後の生活を考えても楽しそうだなと感じたんです。

夫婦共通の趣味はランニング。週末は剣先公園まで軽くジョギングをしています。帰りに寄り道をしてビールやホットワインを飲んだりすることも。妻はもっと本格的で、大阪城まで約10kmのコースを走るのが日課です。最近は昼も夜も川沿いの遊歩道を走るランナーが増えましたね。遊歩道は安全ですし、アップダウンも少ないので初心者でも走りやすいんです。

中之島をメイン会場に行われる「水都大阪フェスティバル」は、毎年楽しみにしています。ドラゴンボートにも乗りましたし、この前はリバーサイドヨガにも挑戦してきました。こうしてたくさんのイベントに参加できるのも、中之島らしい都

会的なライフスタイルだと思います。

3年前にバーベキューに参加したのをきっかけに、町会のさまざまな行事に参加するようになり、今では役員も務めています。妻はホームページを作ることになり、最近ではフェイスブックも始めました。中之島が楽しくて美しい街であり続けるために、少しでも力になればいいと思っています。

よしのり
森 克典さん 由美さん

中之島在住6年目

子育てを終え、夫婦2人で暮らすのに最適な環境を求めて中之島へ。



住む人の声
05

町会の行事に若い人が来てくれて、 続けてきて良かったと思います。

私は昭和4年(1929)に千葉県で生まれ、25歳くらいの時に中之島へ来たんです。両親に「社会のことを勉強してこい」と言われてね。叔父さんが中之島4丁目、今の大阪市立科学館の駐車場のあたりに住んでいて、そこへ引っ越した。だから、最初は2年くらいでまた戻る予定だったんです。

大阪へ来て、最初は守口にあった三洋電機の工場に勤めました。そこで2年ほど働いた後、車の運転免許を取って、土佐堀川を渡ってすぐのところにあった会社で運転手兼社員をして

いました。そうするうちに、両親から「もう帰ってこんでもええ」と(笑)。それで堂島にあった叔父さんの店を手伝うようになったんです。

この粕谷商店は、まあ「よろづ屋」です。

野菜でも果物でも、ほしいと言われたら何でも売った。40年以上、毎日店のある堂島と中之島の往復でした。朝は5時半くらいに出て中央卸売市場で仕入れをして、夜は7時頃まで店にいましたから、長く住んでると言ってもあまり中之島のこととは知らんです(笑)。

中之島のいいところは、やっぱり昔から地域のつながりが強いところでしょうね。今ふり返ると、餅つきが始まったのが大きかった。1970年代くらいかな、区画整理があって、「このままでは住民がバラバラになってしまう」と言って始めたんです。今は若い人も参加してくれますが、結局、ずっと続いているから来てくれるんであってね。でも、やってきて良かったなあと思いますよ。行事で顔を合わせた時も、同じような立場で家族のような感じで話します。町会には若い人にどんどん入って来てもらうのが一番です。

それにしても、こんなに長く中之島に住むことになるとはねえ。戦後の焼け野原だった時代を考えると、こんなにビルが建ち並ぶ街になるとは思ってもみませんでした。

きよし
粕谷 澄さん

中之島在住約60年

25歳頃、中之島に住んでいた叔父宅へ移り住んで以来、中之島で暮らす。





町会へようこそ。

中之島連合振興町会の1年

こんにちは。中之島連合振興町会会長の依田均です。

わたしたちの町会では、

古くから住む人や商売を営む人が集まり、さまざまな活動を続けてきました。

大人も子どもも新しく引越してこられた人も、みんな一緒になって楽しんでいます。

ここでは町会の1年間の主な行事をご紹介します。



7・8月 ラジオ体操

7月下旬から8月末まで、大阪市立科学館南側の広場で毎朝6時半から行われています。長く続く活動ではあるが、子どもの数が少ない時代もあり、もっと期間が短かったのですが、数年前から新しく住み始めた人たちが手伝ってくれるようになったおかげで、8月いっぱいまで延長することになりました。



よいしょ

8月 しょうろう 精霊流し

お盆の最中、毎年8月15日に行っています。堂島川の河川敷、中之島バンクスの東側に燭台を設置。灯りをともした船を川に流すのではなく、ロウソクを献灯して先祖の霊を見送ります。企業で働く人たちがボランティアで手伝ってくださるのも、オフィスが集まる中之島ならではの地域行事と言えます。



9月 観月会

中秋の名月の頃に合わせたお月見会です。お花見と同じく、科学館裏手のお弁当スペースで行われています。昨年はあいにくの天気であり盛大には開催できませんでしたが、盆踊りの練習会も兼ねており、年配のご婦人たちが新米ママさんたちに踊り方を教えたりと、世代をつなぐという大切な役割もあります。



4月 花見

町会の行事と言えばやっぱりこれ。以前は中之島にあった阪大医学部のキャンパス内に咲く桜並木でお花見をしていましたが、現在は大阪市立科学館の敷地内に咲くツツジで代用しています。科学館裏手のお弁当スペースで飲んだり食べたりします。地域の人たち同士のつながりを深めるためには、なくてはならない行事の一つなのです。



12月 餅つき

1年の締めくくりはこれ。会員の高齢化で一時中断していたのですが、3年前から復活しました。子どもたちはもちろん大はしゃぎ、新しく住むようになったママさんたちにも「つながりができて嬉しい」と好評です。2014年は、堂島にあるクラーク記念国際高校の学生も参加し、4丁目の美術館建設予定地にぎやかに行われました。



6月 バス旅行

毎年、希望者を募って観光バスに乗って日帰り旅行を行っています。2014年は兵庫県三田市で立杭焼体験をしたり、シイタケ狩りやバーベキューをしました。以前は役員だけでお金を積み立て1泊旅行をしていましたが、最近は親子連れの参加者が増えたため日帰りになっています。住む人に合わせて、少しずつ活動内容も変わりつつあります。



安心安全な生活のための取り組みも進められています。

中之島に住んでいると話す、「川に囲まれているのに水害対策は大丈夫なの?」と聞かれることがあります。しかし、昭和36年(1961)の第二室戸台風以降、中之島住民の防災意識は高く、日常的に防災活動をしています。みんなが安全に暮らせるように、社会福祉協議会会長安達吉弘さんや災害救助部長の大矢有作さん(写真)や淀川左岸水防第5分団長の一本松慶さんをリーダーに、定期的な防災訓練の実施、備蓄品の点検、災害時に使用する公園の美化活動、独居老人への声掛けなどを行っています。



『中之島の足あと』を 手に取ってくださったみなさんへ。

大阪の中之島は、島内に大規模な中之島公園を抱き、大阪市中央公会堂、大阪府立中之島図書館、日本銀行大阪支店などの歴史的建造物や、大阪市役所、国立国際美術館、大阪大学中之島センター、大阪市立科学館、大阪府立国際会議場など多数の文化施設があります。

また超高層オフィスビル群が緑の中に建設されており、それらのオフィスには、日本を代表する国際企業が入居し、ワールドビジネスを展開すると共に世界に情報を発信する大阪の顔の役割を担っています。

ここ数年、中之島では橋や護岸のライトアップが行われたり、遊歩道や公園が整備されるなど、「住みたい」と言われる街になりました。超高層マンションを含む数棟のマンションが建設され、島内人口は急激に増え、2012年には2,400名を超えました。

新しく住むようになった人の多くは若い人たちです。その人たちに知ってほしいのは、今の中之島があるのは、古く

から住む人たちがいたからこそだということです。この本は、中之島連合振興町会のみなさんと一緒に
なって作ったものです。ぜひこの本を通して、中之島の歴史や住む人の思いに触れてほしいと思いま

す。そして、もっと中之島を愛し、長く住み続けてほしい。この本が、そのきっかけになることを願っています。

中之島連合振興町会 会長 ^{よ だ ひとし}
依田 均



中之島連合振興町会に 入りませんか？

中之島連合振興町会の現在の加入件数は約60世帯。加えて19事業所が加入しています。ここ数年、マンションが増えたこともあり、会員数は増えつつあります。

中之島に住んでいれば、特に加入のための条件はありません。中之島の企業に勤めている人でも入会できます。会費は個人なら月額300円、法人は月額一口1,000円から。勧誘のために会員が家庭や企業を回ったりすることはありません。

町会へ入りたいと思ったら、まずは住んでいる場所の町会長に連絡を。中之島の住宅が掲載された詳細図に各町の会長の連絡先が書かれています。どんな雰囲気なのか知りたい場合は、お花見などの行事に参加してみてください。会員でなくても行事には参加できます。大人は会員／非会員を問わず会費制で、子どもは無料で行われることが多いです。お待ちしております！

* * *

ホームページ&facebookも あります。

中之島連合振興町会では、ホームページを開設して地域の情報や活動内容を発信しています。季節ごとの行事の案内やレポートが見られ、町会の様子がよくわかります。また、フェイスブックのアカウントもあり、こちらでもたくさんの写真を見ることができますよ。

<http://www.osaka-nakanoshima.com/>



☆中之島連合振興町会の活動や

入会などに関する問い合わせはメールでも可能。

nakanoshima.web@gmail.com まで

お気軽にご連絡を！



「中之島の足あと」(概要版)

2015年3月15日発行

編集・発行／中之島連合振興町会

企画・製作／株式会社ダン計画研究所 株式会社140B

デザイン／田中直美

写真／浜田智則

地図／齋藤直巳

※本事業は大阪市地域活性化事業基金(ポートピア梅田環境整備協力費)により実施しています。

写真／「昭和40-41年 日本特殊地図協会地図」